

〈書評〉

宮地隆廣 著

『解釈する民族運動—構成主義による ボリビアとエクアドルの比較分析』

東京大学出版会 2014年

名古屋大学 岡田 勇

書評を依頼された際の第一感は、まずこれをどのように要約できるだろうか、というものであった。本書は膨大な資料を丁寧に読み込んだ労作であり、後述するように、資料を綿密に読み解いた上で現れてくる理解にこそ価値を見出している。その一方で、論旨はまったく拡散しておらず明晰であり、必要な部分にしぼってよく整理されている。そのため300頁を超す大部でありながら、議論は脇道にそれることなく進んでいく。もしボリビアやエクアドルや両国における先住民運動に造詣の深い読者ならば、様々な背景知識が必要最小限にとどめられているように感じるかもしれない。また、脚注も面白い。より詳しく既存研究との関係を知りたい方や、膨大な資料と悪戦苦闘されている諸兄においては、特に事例を扱っている2章～5章の脚注にも目を通していただきたい。

さて、言い訳は以上にして、以下では可能な限りの要約を行った上で、若干のコメントを述べることにしたい。本書の構成は次のとおりである。

序章 規範形成から民族運動を分析する—問題設定と着眼点

第1章 実証的構成主義—フレームワーク

第2章 ボリビア I—高地先住民運動

第3章 ボリビア II—低地先住民運動

第4章 エクアドル I—高地先住民運動

第5章 エクアドル II—低地先住民運動

終章 解釈する民族運動—結論と含意

中心となる問いは、ボリビアとエクアドルそれぞれの高地と低地、計4地域の先住民運動の政権獲得行動の違いである。政権獲得行動には、選挙への参加と、

「制度外的権力獲得」（クーデターあるいは既存の統治機構と平行な統治機構の建設）の2つがある（5-6頁）。念のため付言すると、ボリビアやエクアドルの先住民運動といえば、街頭でのデモ行進や道路封鎖などが注目されることが多いが、筆者は政治的権力の獲得に関わるものに限定している。筆者がとりあげる2つの政権獲得行動の区別は、民主主義の手続き的ルールを守るか破るか、という民主主義論にも結び付くものである（277-279頁）。

全4地域における政権獲得行動の違いは、以下の表のとおりである。終章（267頁）からそのまま転記したものである。

国	地域	選挙参加	制度外的行動
ボリビア	高地	早い（1978～）	早い（1986～1992）
	低地	遅い（1997～）	実施せず
エクアドル	高地	遅い（1996～）	遅い（1991～2000）
	低地	早い（1987～）	遅い（1991～2000）

序章では、まず政治・地理・経済・思想（インディヘニズモ）・国際環境といった諸条件が共通している中で、なぜ4地域で政権獲得行動の違いが見られるのかが問いとして示される。筆者が主張するのは規範、すなわち、あるアイデンティティを有する人間集団にとってふさわしい行動の基準が、行動に決定的な影響を与えたというものである（15頁）。これは構成主義の立場である。

第1章前半では、筆者が主張する構成主義のフレームワークが明らかにされる。構成主義は、規範、アイデア、フレーム、エージェンシーといった概念で扱われ、実証主義に対して懐疑的な認識論にまで発展する立場もあるが、本書では、因果関係を分析する枠組みとして規範を用いようとする立場がとられ、そのために踏まえるべき手順が詳しく議論される。

第1章後半では、対抗仮説が検討される。まず、人口規模、選挙制度、首都などの行政拠点からの距離、農民階級としての権力構造の黙認、固定的な文化主義といったものは、満足な回答を与えることができないと批判される。続いて、筆者と同じ構成主義を唱える議論、特にシルビア・リベラ・クシカンキ（Silvia Rivera Cusicanqui）に代表される「記憶」論者について、記憶とそれ以外を区別できていなかったり、根拠の提示が十分でないとして批判される。

第1章の議論は、2つの点で評価できる。第1に、ボリビアやエクアドルの先住民運動に関する研究において、様々な言説や概念がこれまでしばしば恣意的に扱われてきたことが正面から批判されている。第2に、批判だけにとどまらず、

構成主義を用いた実証研究を試みる際に何を行わなければならないかという、一般的な参照規準として発展させている。

例えば、近年のボリビアでも、言説や概念を分析枠組みとして用いる際には、より注意深く扱われなければならないことが指摘されるようになっている。国連開発計画のシニア政治顧問であるフェルナンド・カルデロン（Fernando Calderón）は、ボリビア社会学の泰斗であるが、昨今の先住民や左派右派といったアイデンティティにまつわる政策や政治的立場について、様々なアイデアや言説が実態をとまわずに乱立する、いわば「ハイパーインフレーション」状態にあると指摘した（2011年2月、書評者とのインタビュー）。十分な根拠がないままアイデアや言説を用いることは、少なくとも研究者の間では批判されてしかるべきであり、それに対して第1章の議論は建設的な貢献になっている。

第2章から第5章は、それぞれ2か国4地域の先住民運動について、背景状況として資源動員と政治的機会構造を踏まえた上で、規範の形成、それに基づく行動、さらに規範の変更と行動が詳細に示される。用いられる情報は可能な限り網羅的であって、引用リストを数えるだけで321点の一次資料（組織の決議文書、発表・宣言文書など）、約4000点の報道資料、回顧録やインタビューを用いている。1970年代までさかのぼって、過去の報道資料を丁寧におさえている点も特筆に値する。筆者の目論見は、まさにこれまで比較的軽視されてきた組織文書などの資料に有用性を見出すことにある（2014年5月刊の『ラテンアメリカ・カリブ研究』第21号における著者自身による紹介81-82頁）。

第2章以下の各章については、要約するには紙幅が足りないため、規範が説明力を持つという筆者の理論的な主張にとって特に重要だと考えられるものをいくつか取り上げたい。いくつかは筆者が明示的に主張している点であるが、書評者が読みながら考えた点もある。

第1に、両国における高地、低地という地理的条件は重要でない。ボリビアでは高地先住民運動が選挙参加を早くから採用し、低地先住民運動は陳情志向が強かったのに対し、エクアドルでは選挙参加を早くから主張したのは高地ではなくむしろ低地先住民運動であった。

第2に、重要な対抗仮説である選挙制度やそこから合理的に想定されるインセンティブも、しばしば行動を説明できない。ボリビアとエクアドルの高地先住民運動には、1980年代まで政党不信という共通の条件があったにも関わらず、ボリビア高地では選挙参加が選択されたのに対し、エクアドル高地では選択されなかった。エクアドル高地のECUARUNARIの場合、既存政党が

ECUARUNARI と関係のない先住民を議員候補に擁立して当選した事例があったにも関わらず、選挙参加を選択しなかった (p.172)。

第3に、政治的機会が制限されていたとしても、規範が行動を説明する事例がある。ボリビア高地では、1992年以降に選挙参加のみを正当とする規範が形成され、コチャバンバ・チャパレの農民組合は、エボ・モラレスに対する議員解職動議などがあったにも関わらず、選挙重視の規範を維持し続けた (pp.100-101)。

第4に、政治行動の漸進的な変化を説明する上では、規範への着目が決定的であるように思われる。エクアドル高地先住民運動を中心として1992年に企画された選挙ボイコットは失敗し、やがて選挙参加が正当と見なされるようになるが、これは同国の低地先住民運動の影響を受けた結果、規範が漸進的に変化としたものとして理解できる (pp.193-195)。それぞれの状況をよく詳しく調べるならば変化のタイミングを説明する対抗仮説を見つけ出すことは可能かもしれないが、変化が漸進的に起こったことを説明できるような対抗仮説を考えるのは難しい。

第5に、異なった政権獲得行動が、相互排他的ではなく両立可能な行動として現れることがあり、規範への着目はそれをうまく説明している。1990年代後半以降のエクアドル高地及び低地において、選挙参加と制度外的政権獲得を目指す先住民議会の実施とが共に見られたが、これは筆者が第4、5章で繰り返し論じているように、エクアドルの高地と低地の先住民運動における規範形成とその変化を中長期的に踏まえることによって理解できる。

終章では、全体の内容が再確認されるとともに、「経験と解釈を通じて自らのアイデンティティを創造・承認・修正するエージェント」(p.274)として先住民運動を評価すべきこと、さらに民主主義との関係についても触れられている。

最後に、本書を読了した上で、2つほどコメントを述べたい。第1に、対抗仮説との関係である。まず筆者は「本書は、規範が行動を説明するという主張の正しさを、他の仮説との比較をしつつ、唱えようとしている」(p.42)と述べ、対抗仮説と説明力を争うべきだと主張する。他方で、「規範による説明の厳密さ」というところで、資源動員と政治的機会構造が規範とともに意味をもち、「政権獲得行動に関する特定のレパトリーが選択されることは、規範だけによって完璧に説明されるものではないと言える」(pp.17-18)とする。例えば、対抗仮説の一つである選挙制度がしばしば意味をもつことは、コチャバンバの農民組合の選挙参加に関する部分で触れられている (pp.95-96)。

この点は本書では明らかではないが、書評者は次のような2つの論理構成が

あると考える。(1) そもそも規範以外の仮説では選択された行動のレパートリーを説明できない場合と、(2) 資源動員や政治的機会構造が必要条件であったとしても、規範が十分条件であるため見落とすことはできない(規範形成が無い限り、説明が不十分) 場合である。

いずれにしても規範が重要だという筆者の主張には同意するが、(2) は次のような点から興味深い。しばしば構造的説明において、ある条件と結果が一致して確認できたとしても、それが単なる共起関係なのか(一致して観察されただけ)、それとも因果関係と言えるのかについては近年よく議論される場所である。例えば選挙制度改革にともなって政党システムが変化することが見られたとして、それがたまたま一緒に見られただけなのか、前者によって後者が導かれたと実証的に明らかにできるかは大きな違いである。規範に焦点を合わせるとき、このような因果関係についての説明のレベルが問題となっていると考えられる。

第2に、本書では「有力な」先住民組織に焦点が当てられ、その基準として、1つの県にとどまらない活動と、歴史の古さによる主導権という条件が与えられている(p.18)。この基準はさらに突き詰めて議論されても良いと思われる。

筆者は「分析対象となる組織の規範形成の過程を明らかにするには、全体方針として採用されなかった規範も視野に入れておく必要がある」(p.19)とも述べているが、全く検討されなかった組織もある(第2章 p.103の脚注8や第4章 p.204の脚注4)。それらの組織については、いつも他の組織に対抗しようとする、いわば他の組織に依存した戦略をとったり、政府と近い関係にあったりすることが指摘される。確かにそのような組織では、規範形成を行うエージェンシーとしては考え難いかもしれない。しかし、筆者が指摘するこれらの条件は、あまり詳細には論じられておらず、広範囲な地域での活動や歴史の古さといった条件とは必ずしも一致しないのではないだろうか。広範囲の影響力と長い歴史をもつ組織であっても、しばしば政府と近い関係になることもあるだろう。いったいどのような条件下で、規範が重要な説明力をもつと考えられるのかは、まだ議論の余地があるように思われる。

いずれにせよ、本書は理論と実証を丁寧に紡ぎ合わせながら、エクアドルやボリビアの先住民運動に対する理解と関心をかきたてる大作として一読をお勧めしたい。

